蝿

横光利一

一

真夏の宿場は空虚であった。ただ眼の大きな一疋の蝿だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の巣にひっかかると、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと揺れていた。と、豆のようにぼたりと落ちた。そうして、馬糞の重みに斜めに突き立っている藁の端から、裸体にされた馬の背中まで這い上った。

二

馬は一条（ひとすじ）の枯草を奥歯にひっ掛けたまま、猫背（ねこぜ）の老いた馭者（ぎょしゃ）の姿を捜している。

馭者は宿場（しゅくば）の横の饅頭屋（まんじゅうや）の店頭（みせさき）で、将棋（しょうぎ）を三番さして負け通した。

「何（な）に？　文句をいうな。もう一番じゃや。」

すると、廂（ひさし）を脱（はず）れた日の光は、彼の腰から、円（まる）い荷物のような猫背の上へ乗りかかって来た。

三

宿場の空虚な場庭（ばにわ）へ一人の農婦が馳（か）けつけた。彼女

はこの朝早く、街に務(つと)めている息子から危篤の電報を受けとった。それから露に湿(しめ)った三里の山路(やまみち)を駈け続けた。

「馬車はまだかのう?」

彼女は馭者部屋を覗(のぞ)いて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかのう?」

歪(ゆが)んだ畳の上には湯飲みが一つ転っていて、中から酒色の番茶(ばんちゃ)がひとり静(しずか)に流れていた。農婦はうろうろと場庭を廻ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかの?」

「先刻出ましたぞ。」

答えたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早(は)よ来ると良かったのじゃが、もう出ぬじゃろか？」

農婦は性急な泣き声でそういう中(うち)に、早や泣き出した。が、涙も拭(ふ)かず、往還(おうかん)の中央に突き立っていてから、街の方へすたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馭者は将棋盤を見詰めたまま農婦にいった。

農婦は歩みを停めると、くるりと向き返ってその淡い眉毛(まゆげ)を吊り上げた。

「出るかの。直ぐ出るかの。悴（せがれ）が死にかけておるのじゃが、間に合わせておくれかの？」

「桂馬（けいま）と来たな。」

「まアまア嬉しや。街までどれほどかかるじゃろ。いつ出しておくれるのう。」

「二番が出るわい。」と馭者はぽんと歩（ふ）を打った。

「出ますかな、街までは三時間もかかりますかな。三時間はたっぷりかかりますやろ。悴が死にかけていますのじゃ、間に合せておくれかのう？」

野末の陽炎（かげろう）の中から、種蓮華（たねれんげ）を叩く音が聞えて来る。若者と娘は宿場の方へ急いで行った。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

「持とう。」

「何アに。」

「重たかろうが。」

若者は黙っていかにも軽そうな容子（ようす）を見せた。が、額（ひたい）から流れる汗は塩辛（しおから）かった。

「馬車はもう出たかしら。」と娘は呟（つぶや）いた。

若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、

「ちょっと暑うなったな、まだじゃろう。」

二人は黙ってしまった。牛の鳴き声がした。

「知れたらどうしよう。」と娘はいうとちょっと泣きそうな顔をした。

種蓮華を叩く音だけが、幽(かす)かに足音のように追って来る。娘は後を向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。

「私が持とう。もう肩が直(なお)ったえ。」

若者はやはり黙ってどしどしと歩き続けた。が、突然、「知れたらまた逃げるだけじゃ。」と呟いた。

五

　宿場の場庭へ、母親に手を曳(ひ)かれた男の子が指を銜(くわ)えて這入(はい)って来た。
「お母ア、馬々。」
「ああ、馬々。」男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ馳けて来た。そうして二間(けん)ほど離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりやッ、こりやッ。」と叫んで片足で地を打った。
　馬は首を擡(もた)げて耳を立てた。男の子は馬の真似をして首を上げたが、耳が動かなかった。で、ただやたら

に馬の前で顔を顰（しか）めると、再び、「こりゃッ、こりゃッ。」と叫んで地を打った。

馬は槽（おけ）の手蔓（てづる）に口をひっ掛けながら、またその中へ顔を隠して馬草（まぐさ）を食った。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」

六

「おっと、待てよ。これは倅の下駄を買うのを忘れたぞ。あ奴（いつ）は西瓜（すいか）が好きじゃ。西瓜を買うと、俺（おれ）もあ奴

も好きじゃで両得じゃ。」

　田舎紳士（いなかしんし）は宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戦い続けた効（かい）あって、昨夜漸（ようや）く春蚕（はるご）の仲買（なかがい）で八百円を手に入れた。今彼の胸は未来の画策のために詰っている。けれども、昨夜銭湯（せんとう）へ行ったとき、八百円の札束を鞄（かばん）に入れて、洗い場まで持って這入って笑われた記憶については忘れていた。

　農婦は場庭の床几（しょうぎ）から立ち上ると、彼の傍（そば）へよって来た。

「馬車はいつ出るのでござんしょうな。悴が死にかかっていますので、早（は）よ街へ行かんと死に目に逢（あ）えま

い思いましてな。」
「そりゃいかん。」
「もう出るのでござんしょうな、もう出るって、さっきいわしゃったがの。」
「さアて、何しておるやらな。」
若者と娘は場庭の中へ入ってきた。農婦はまた二人の傍へ近寄った。
「馬車に乗りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」
「出ませんか？」と若者は訊き返した。
「出ませんの？」と娘はいった。
「もう二時間も待っていますのやが、出ませんぞな。

街まで三時間かかりますやろ。もう何時になっていますかな。街へ着くと正午（ひる）になりますやろか。」
「そりゃ正午や。」と田舎紳士は横からいった。農婦はくるりと彼の方をまた向いて、
「正午になりますかいな。それまでにゃ死にますやろな。正午になりますかいな。」
という中（うち）にまた泣き出した。が、直ぐ饅頭屋の店頭へ馳けて行った。
「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじゃろか？」
猫背の馭者は将棋盤を枕にして仰向（あおむ）きになったまま、簀（す）の子（こ）を洗っている饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸(む)さらんかいのう?」

七

馬車は何時(いつ)になったら出るのであろう。宿場に集った人々の汗は乾いた。しかし、馬車は何時になったら出るのであろう。これは誰も知らない。だが、もし知り得ることの出来るものがあったとすれば、それは饅頭屋の竈(かまど)の中で、漸く脹(ふく)れ始めた饅頭であった。何(な)ぜかといえば、この宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手(しょて)をつけるとい

うことが、それほどの潔癖から長い年月の間、独身で暮さねばならなかったという彼のその日その日の、最高の慰めとなっていたのであったから。

八

宿場の柱時計が十時を打った。饅頭屋の竈は湯気を立てて鳴り出した。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切った。馬は猫背の横で、水を充分飲み溜めた。ザク、ザク、ザク。

九

馬は馬車の車体に結ばれた。農婦は真先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた。

「乗っとくれやア。」と猫背はいった。

五人の乗客は、傾く踏み段に気をつけて農婦の傍へ乗り始めた。

猫背の馭者は、饅頭屋の簀の子の上で、綿のように脹らんでいる饅頭を腹掛けの中へ押し込むと馭者台の上にその背を曲げた。喇叭（らっぱ）が鳴った。鞭（むち）が鳴った。

眼の大きなかの一疋の蠅は馬の腰の余肉（あまじし）の匂いの中から飛び立った。そうして、車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、漸く蜘蛛の網からその生命（いのち）をとり戻した身体を休めて、馬車と一緒に揺れていった。

馬車は炎天の下を走り通した。そうして並木をぬけ、長く続いた小豆畑（あずきばたけ）の横を通り、亜麻畑（あまばたけ）と桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、漸く溜った馬の額の汗に映って逆さまに揺らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饒舌（じょうぜつ）が、早くも人々を五年以来の知己（ちき）にした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握って、その生々した眼で野の中を見続けた。

「お母ア、梨々。」

「ああ、梨々。」

馭者台では鞭（むち）が動き停った。農婦は田舎紳士の帯の鎖に眼をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

馭者台では喇叭が鳴らなくなった。そうして、腹掛けの饅頭を、今や尽（ことごと）く胃の腑（ふ）の中へ落し込んでし

まった馭者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きな蠅が押し黙った数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光りを受けて真赤に栄えた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下して、そうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたときしみ出す音を聞いてもまだ続いた。しかし、乗客の中で、その馭者の居眠りを知っていた者は、僅かにただ蠅一疋であるらしかった。蠅は車体の屋根の上から、馭者の垂れ下った半白の頭に飛び移り、それから、濡れた馬の背中に留って汗を舐めた。

馬車は崖の頂上へさしかかった。馬は前方に現れた

眼匿(めかく)しの中の路に従って柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考えることは出来なかった。一つの車輪が路から外(はず)れた。突然、馬は車体に引かれて突き立った。瞬間、蠅は飛び上った。と、車体と一緒に崖の下へ墜落(ついらく)して行く放埒(ほうらつ)な馬の腹が眼についた。そうして、人馬の悲鳴が高く一声発せられると、河原の上では、圧(お)し重(かさ)なった人と馬と板片との塊(かたま)りが、沈黙したまま動かなかった。が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まったその羽根に力を籠(こ)めて、ただひとり、悠々(ゆうゆう)と青空の中を飛んでいった。

底本：「日輪・春は馬車に乗って　他八篇」岩波文庫、岩波書店
　　　１９８１（昭和56）年８月17日第１刷発行
　　　１９９７（平成９）年５月15日第23刷発行
入力：大野晋
校正：瀬戸さえ子
１９９９年７月９日公開
２００３年10月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。